

すこやか&スマイル

お盆（盂蘭盆会）



平年より15日、昨年より22日も遅くやっと梅雨が明けました。と、途端に35℃を超える猛暑日…集中豪雨で大きな被害がでました。被災された方々には心からお悔やみとお見舞いを申し上げます。

今月は、建築とは関係の無い『お盆』のはなしです。

京都では新暦の8月13日から16日がお盆の期間とされていますが、宗派によって多少違うようですし、時代によって、また、地域によっても異なります。

東京近辺は新暦7月15日前後、沖縄では旧暦7月15日前後、今年の旧暦7月15日は9月3日になります。

私が住んでいるあたりでは、7日から『珍皇寺（ちんのうじ）通称六道さん』に迎え鐘を撞きに行きます。

ここの井戸は冥府と繋がっていて、小野篁は井戸を通して閻魔大王のもとで裁判の補佐をしていたんだそうです。同時に五条坂で陶器祭りも始まります。

祖先の霊を祭る行事で、仏教の『盂蘭盆』のことといわれますが、古来から祖先崇拜の行事・風習があり、後から伝来した『盂蘭盆会（うらぼんえ）』の行事が意味や内容が似ていたのを取り込まれていったと考えられています。推古天皇14(606)年に法興寺で催されたのが最初とされ、奈良・平安時代には毎年7月15日に公事として行われていたそうです。

盂蘭盆経：盂蘭盆会とはサンスクリット語のウランバナ（烏藍婆拏：逆さ吊の意）で、逆さに吊り下げられるような苦しみにあっている人を救う法要という意味です。

安居（あんご）の最中、神通力第一といわれたお釈迦様の弟子の目連尊者が、亡くなった母親の姿を探したところ、餓鬼道に堕ち喉を枯らし飢えに苦しんでいました。そこで水や食べ物を与えましたが、ことごとく灰になり口に入りませんでした。そこで、どうすれば母親を救えるかをお釈迦様に尋ねたところ、「安居の最後の日に全ての衆僧に食べ物を施せば母親を救うことができる」と聞かされ、その通りにすると母親は救われたというお話です。

釜蓋朔日（かまぶたついたち）：1日を地獄の釜の蓋が開く日として墓参りなどをして先祖のお迎えを始めます。

棚機（幡）（たなばた）：7日には元は水辺に小屋を建て、先祖を迎えるための棚とその棚に捧げる幡を拵えてお祭りします。この織物を織る機織り機が棚機で、その織物を織る女性が棚機都女（たなばたつめ）です。七夕の織女と共通点が多くて混同されて今に伝わっているようです。

迎え火：13日の夕刻、家の門口や辻で麻幹（おがら）や麦藁（むぎわら）を焚いたり、墓から家までの道に樺皮を割竹につけて立てておき、順に火を点けたりする地方があります。この明かりを目標にして家に帰ってきて下さいという意味の言葉を唱え、ご先祖様を家に迎えるための道案内としています。御招霊（おしょうらい）と言い、大きな松明で先祖の霊をお迎えする地方もあります。

送り火：16日の夕方に火を焚いて先祖の霊を還します。京都「五山の送り火」や川や海に灯籠を流す「灯籠流し」「精霊流し」が行われます。

盆踊り：元々はお盆に帰ってきた祖先の霊を迎え慰め、そして返すための行事でした。地獄での受苦を逃れた亡者たちが喜んで踊る状態を模したともいわれています。

藪入り（やぶいり）：今でいうお盆休み。江戸時代、正月と盆には奉公人が休みをもらって実家に帰ることができる期間で、藪入りには新しい着物と小遣いが与えられて親元に帰りました。また、他家に嫁いだ娘が実家に帰ることができる時期でもあり、自分と先祖との繋がりを確認する大切な行事といえました。

※キュウリの馬とナスの牛：地方によっては、お盆の期間中に故人の霊魂があこの世とこの世を行き来するための乗り物として、キュウリやナスで動物（精霊馬：しょうりょううま）を作るところがあります。キュウリは足の速い馬に見立てられ、あの世から早く戻ってこれるように、また、ナスは歩みの遅い牛に見立てられ、この世からあの世へ帰るのに少しでも遅くなるように、そして、供物を牛の背に乗せて持って帰ってもらうようにとの願いが込められているそうです。



精霊馬

古くからの農耕儀礼や祖霊祭祀などが融合して伝えられてきたのが日本のお盆です。お盆の習わしも、地域や宗教・宗派によって、また、時代によって様々に形を変えながら伝えられてきました。

日本のお盆行事は、家族や一族が集まり先祖を供養し、亡くなった人を偲ぶ行事として行われます。

五山の送り火

8月16日の夜、京都盆地の周囲の山に炎で描かれた『大』『妙法』『船』『鳥居』の文字や形が浮かび上がります。お盆にお迎えした祖先の霊をふたたび冥府に還す精霊送りの行事です。午後8時、東山三十六峰に属す如意ヶ嶽の大文字山に点火されます。松ヶ崎の『妙法』・西賀茂明見山の『船形』・北区大北山の『左大文字』・北嵯峨水尾山の『鳥居』の順に次々と浮かび上がります。



成立時期や由来については、詳しいことが殆んど分かっていないのだそうで、江戸時代後期の文献に「浄土寺には大文字…」の記述があるそうです。

集落ごとの自治体制が安定し、地域ごとの力が強まってきた室町時代後期、盆踊りやお盆の行事が盛大になってきました。火を焚いて祖先の霊を鎮める行事の『万灯（まんどう）』も家庭から地域へと広がり、さらに送り火へと大規模化していったのではないかと説があります。

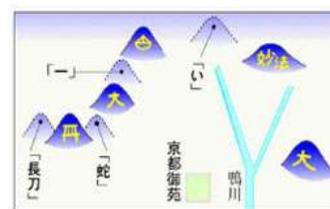
『大』の字は大自然を表した『五大』を意味します。仏教の教えのなかで、この世の万物は『地水火風空』の五大で構成されている事が説かれています。

自然への畏敬と祖先を敬う気持ちを象徴しているのだそうです。

一方で『大』は人の形とも言われます。漢字は象形文字で大の字は人が大きく手を広げている形からできています。お盆に帰ってきたご先祖様が、妙法蓮華経のお経をいただき船に乗ります。遅れた人を更に乗せて冥界との門である鳥居をくぐってあの世に帰るのだと聞いたことがあります。

江戸時代には五山以外にも送り火があったのだそうです。

左京区市原に『い』・右京区鳴滝に『一』・北嵯峨に『蛇』・高雄に『長刀』などが在ったらしい。



京都新聞ホームページの五山送り火のページに詳しく掲載されています。

『送り火よもやま話』には、興味深い記事も掲載されています。

<http://www.kyoto-np.co.jp/kp/koto/gozan/08.html>

地藏盆

毎月24日は地藏菩薩の縁日です。特にお盆の期間中である旧暦7月の24日は地藏盆とよばれお祭りされます。

最近では8月下旬の土日に行うところが多いようです。



各町内ごとにお地藏さんの前に屋台や祭壇を組み、花や餅などをお供えし提灯などを飾り付けます。祠の前にテントを張ったり、お地藏さんを別の場所に移してお祭りしたりと、町内によって様々です。

近年は少子高齢化で、子供の数より大人が目立つように思います。

近くのお寺の住職の読経があり、数珠繰りをして、子供はお菓子を食べ、ゲームなどの遊びに興じ、福引などが行われます。

以前は、子供にとっては夏休み最後のイベントで、宿題の出来不出来に関係なく遊べた日でしたが、最近では2学期制で、この頃には夏休みが終わっていることもあって、いま一つ盛り上がりにかけるような気がします。

地藏菩薩：切利天に在って釈迦仏の付属を受け、釈迦の入滅後56億7000万年後に弥勒菩薩が出現するまでの間、現世に仏が不在となってしまいうため、その間、**地獄道・餓鬼道・畜生道・修羅道・人道・天道**の六道を輪廻する衆生を救う菩薩であるとされます。

梵名はクシティ（大地）・ガルバ（胎内）で、その意味から『地藏』と訳されます。

道教の十王思想と結びついて、閻魔大王は地藏菩薩の化身であると言われるようになり、どの地獄へ送るかの裁定をする裁判長の閻魔大王と、地獄へ向かう亡者の弁護をする地藏菩薩とが同一ということになります。

浄土信仰が普及した平安時代以降、極楽浄土に往生がかなわない衆生は地獄に落ちるものという考えが強まり、地藏菩薩に対しての信仰が集まるようになります。

親より先に死んだ子供が、賽の河原で鬼に責められるのを地藏菩薩が助けるという信仰もあり、また、道祖神信仰とも結びついて、町（村）外れや街角（辻）にお地藏さんが祭られるようになります。

information

【介護】ひとりでがんばらないで！～信頼と助け合いの社会を目指して～

開催日時：平成21年9月6日(日) 午前10:00～午後4:00

会場：京都市勧業館「みやこめっせ」1階 第2展示場

講演：岡本民夫氏、相談コーナー、検査コーナー、展示コーナー
アンパンマンショー、クイズ、お楽しみ抽選会etc.

入場無料

主催：京都府医療推進協議会

※詳細は弊社ホームページでご確認下さい

<http://www/care-life.info>